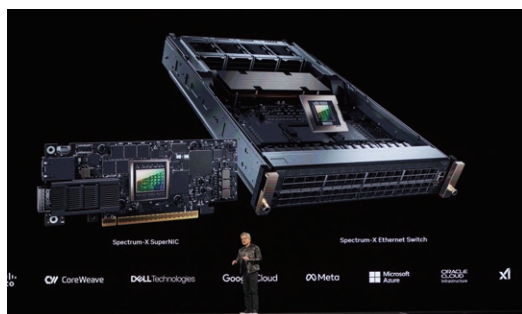


ジェンソン・フアン

エヌビディアCEO

「ビッグバン」を機に
AI分野にシフト

ここ数年で企業価値を飛躍的に高めた企業として、米国のファブレス半導体メーカー、エヌビディアを思い浮かべる人は多いだろう。AI向け半導体「GPU（画像処理半導体）」で圧倒的シェアを持つ同社の時価総額は、2024年6月世界首位に浮上。現在も上位順位を保っている。その創業者の1人にしてCEO（最高経営責任者）を務めるのがジェンソン・フアン氏（62歳）。黒い革ジャンがトレードマークだ。



2025年3月に行われたエヌビディア「年次開発者会議」の様子

1963年、台湾で生まれたフアン氏は9歳で渡米。大学卒業後は大手半導体企業等で経験を積んだ。エヌビディアを創業したのは1993年。ゲーム用半導体の開発を手掛けた。起業から数年間は破綻寸前のピンチもあったというが、1999年、米ナスダック市場への上場を果たした。とはいえこの時点で、後の成長を予想できた人は少なかったに違いない。2010年代半ば頃までの同社の評価は、あくまでも「ゲーム用半導体メーカーの1社」だった。

同社躍進のきっかけとなったのが、フアン氏の戦略転換だ。2012年、AIの国際大会における画期的な成果を目の当たりにしたフアン氏はこれを「ビッグバン」と呼び、AI分野への経営

資源の集中を決断。以来10年余りで、同社を巨大テック企業へと成長させた計算になる。

迅速な意思決定を生む
フラットな組織運営

「常に最高の人材を雇うべし」「将来的な成功の初期の兆しに着目せよ」「光の速さで動け」等、多くの語録が伝わるフアン氏だが、企業運営の最大の特徴とされているのが、同社の「フラットな組織構造」だ。

一般に米国企業では、CEO直属の部下は少数であることが多いとされるが、フアン氏直属の幹部の数は60人に上る。現場の情報を直接吸い上げ、迅速な意思決定につなげることが狙いだ。幹部とは1対1の会議をしないことも知られている。情報の透明性を高め、知識の共有を図るための措置。「私の仕事は経営することではなく、リーダーであること」をモットーとするフアン氏らしい手法だ。

かつて台湾積体回路製造（TSMC）のカリスマ創業者である張忠謀（モリス・チャン）氏から二度にわたリスクアウトされ、張氏から、品格や視野、業界経験など「すべてが後継者として考慮するに値した」との評価を受けたフアン氏。クリアすべき課題もあるが、同氏の今後の動きから目が離せないことは確かだろう。



米国カリフォルニア州にある本社オフィス

写真：ロイター／アフロ、AP／アフロ

Profile ジェンソン・フアン 1963年、台湾生まれ。1993年、仲間と3人でエヌビディアを創業。以来30年以上にわたってCEOを務める。「NVIDIA」はラテン語で「羨望」を意味する「INVIDIA」に由来。起業当時開発を手掛けた「NV1チップ」の「NV」から始まるよう「I」を除いた。

主な参考文献：『NVIDIA 大解剖』（島津翔著／日経BP）、『THE NVIDIA WAY』（ティ・キム著／千葉敏生訳／ダイヤモンド社）、日経ビジネス、日本経済新聞ほか